撤退の記

黒部・下ノ廊下（2020/10/24-25）

Ｈ本、Ｓ治（会員外）、Ｈロ

８時ちょうどのあずさ５号で私は私はＨ本さんと旅立った。
ようやく盛りになった紅葉を見に行く人出なのか今日のこの列車は満席だそうだ。
車窓から左手に見える南アルプス、右手に見える八ヶ岳の山々はいずれも晴天の元に色づいた山容を見せていた。
「長野側はこんなんだけど、富山側はなぁ」とＨ本さんが呟いた。
突然現れた冬型高気圧のせいで今日の午後から夜中まで日本海側には冷たい雨の予報が出ているのだ。
「予報じゃ１４時くらいから雨だって言ってっから、うまくすっとそれまでにテント張れっかもしれないけどさぁ。」
この青空を見る限り本当に雨なんか降るのかなと言いたいところなのだけれど。

信濃大町でバスに乗り換え１２：１５に扇沢に到着。長野発で同じ時刻にここへ着くバスに乗ったＳ治さんとも無事落ち合うことが出来た。扇沢の空は白く雲っており、ポツッ、ポツッと雨が落ち出していた。
１２：３０の電気バスで黒部ダム駅へと向かう。降りると改札を通らずにそのまま『下ノ廊下方面』の表示の方へ歩き出す。いよいよだ。いよいよ積年の目標であった下ノ廊下を歩くのだ。意気揚々と通路を抜けて行くと、扉の向こうにそこそこの雨が降っていた。

レインウェアの上下を着てザックカバーを付けて外へ出る。歩き出したのは１３時。ウェアの表面にパラパラという音が聞こえる。
「雨と言うよりはアラレか。アラレの方が濡れなくていい」とＳ治さんが言った。
ここから２００ｍ下の川のレベルまで下りて行くのだが、対岸の山の斜面には紅葉が見えていて今回のタイミングは景色にかなり期待が持てそうだ。
阿曽原小屋から来た人たちとすれ違った。ここまでの道は悪い所は無かったそうだ。長靴で歩いて来たおじさんにも会った。

黒部川を横切る木橋を渡る。渡り切る手前から谷間を塞ぐ黒部ダムの壁が見えた。今日も放水ご苦労さん。
足元の川の流れはダム上流とは違ってどんより灰色がかった緑色をしている。この辺りに居るイワナたちは上流の澄んだエメラルド色の流れを知らないのだろう。

川を右下に見ながら左岸の道を進んで行くと次第に紅葉が濃くなってくる。切り立った灰色の崖にも赤、黄、緑の彩りが添えられている。
Ｖ字谷が右へゆるく曲がって行くと左岸沿いに付いた登山道が先へ伸びているのが見える。下ノ廊下らしい眺めだ。こういう所を進んで行くのだ。道の先にはさらに紅葉の絶景がありそうだ。

急斜面を落ちる滝が見えると内蔵助谷の出合も近い。丸太の置かれた岩屋があり「最悪ここでビバークだな」と話して通り過ぎた。

１４：１０、内蔵助谷出合に到着。内蔵助平へと向かうすぐの所に狭い平地があり、そこをテン場にと考えていた。しかし行ってみるとそこは作業場になっていて人が居るのが見えた。とてもじゃないがテントを張ることはできない。

「どうすっか。もうちょい上がってみっか。」
細い急な上りの道を、テン場候補地を探しながら上がって行く。平らであれば草むらの中でも止む無しの気持ちになっていた。
１０分も上がった所で
「あっちの河原の方へ行ってみよう」とＳ治さんが言い出した。
Ｈ本さんが藪を分けて河原の方へ近づいて行く。藪が切れて河原に出たが
「いや、でも岩がボコボコで張れっかなぁ。」
「いや、沢屋の感覚では必ずいい所があるはず」とＳ治さん。
すると巨岩の脇に狭い砂地のスペースを見つけた。沢の流れよりも高くなっており増水の心配は無い。
「ちょおっと狭いんじゃない。」
「いやいや、整地すれば立派なもんだよ。」
目立った石をどかし、斜めになっていた砂地を足で崩し慣らしていくとそこそこのスペースになった。テントを組み立ててみるとギリギリ張れた。
「ほーら。」
濡れたウェアのままいったんテントに入り、中で脱いで体制を整えた。

「まあまあ、じゃあじゃあお湯でも沸かしてコーヒーでも飲もうか」と言ってるのにＳ治さんがウイスキーを取り出した。
「えっ？もう飲むの？まあだ１５時になってないよ。」
「だって今日はここまででしょう。いいんじゃない飲み始めて。」
Ｓ治さんが最近はまっているという寒天のスナック菓子を出した。するとＨ本さん
「おぉし、じゃあ俺もおススメのつまみいっちゃおうか」と切り干し大根と塩昆布を混ぜ合わせたおつまみを作ってくれた。

だいぶお酒も進んできた頃、向かいに位置するＳ治さんの背後に黒い斑のような影がいくつも見えた。
「もしかしてそれ雪？じゃないですか？」
「えっ？」
Ｈ本さんがテントの壁を肘でバンッと叩くとドサッと音がした。Ｓ治さんも後ろを叩きドサッと黒い斑が無くなった。入口のジッパーを開けて外を見てみると
「雪だ！」
見える範囲、一面が白く覆われつつあった。
「いやいや、どうすっか。確か予報じゃ２１時までくらいは雨でそれから晴れるっちゅうから朝までに溶けちゃえばいいんだけど。」

こうしてるのも何なので夕食を作り始めることにした。米を水に浸し少ししてからテントの中で炊き始めた。
ところがしばらくしてみるとストーブの火が消えている。あわててライターを取り出し火を点けようとしたが点かない。
「Ｈロさんはよほどライターに因縁があるようだな」とＳ治さんが言って自分のライ

ターを取り出し点けようとした。しかし点かない。H本さんのライターでも点かない。さらにＳ治さんが何度もライターを擦るがやはり点かない。
「えーっ？こんなことあるの？」
　ガスがこもってしまうのでテントの入口を開けた。そしてまた懲りずにライターを擦った。すると…やっと点いた。
「もしや酸欠？まさか。でも全員のライターが点かなくて入口開けたら点いたんだからそうかもしれない。だとすると我々も危なかったんだなぁ。」

　無事米が炊き上がり、夕飯のハヤシライスを食べることが出来た。持って来たワインは早くも無くなったが明日の阿曽原小屋ではビールが買えるので問題無い。明日は５時起きとして２１時にはシュラフに包まった。

　５時になってH本さんがガバッと起き上がった。
「５時だけどさぁ、こんなんだからちょっと様子みようか。」
　時間を遅らすことで好転することを願いつつシュラフの中でまた目をつむった。

　それでも６時に起きだし改めて外の様子を窺ってみる。倒木や岩の上には丸みのある雪が積もっていた。１０ｃｍはありそうだ。
「う～ん、どうすっかなぁ。行きたいのは行きたいんだけどなぁ。」
「むしろ私は明日の方が怖い。放射冷却で溶けた雪が凍り付いたら…うん。」
　ここまで来てもちろん行きたいのだが、この中で一番経験の浅い僕が「無理矢理でも」なんてことは言えない。
「いやぁ、ダムからここまでは高さがあんなだけど、阿曽原から先行くと高度がほらこの１０倍もあるんで…ちょっと。」
「はぁー、雪とはねぇ…。ここは来年またってことにしよう。」
　かくして今回は撤退するということに決まった。

　「行かないことに決まったんだったら私の担当の夕食分を朝作らせてほしい。」
　Ｓ治さんが前回の山行で使わなかった野菜やキノコ、サバ缶を使った具たっぷり味噌汁を作り出した。もちろんテントの入口を開けて火を点ける。濃い目に作ったので残飯にかけてそのまま食べて美味しかった。

　テントを撤収。青空がだんだん広がってきて雪をかぶった山の斜面と紅葉の彩りが恨めしいほど美しかった。
　８：１０、テン場を出発。
「下ノ廊下は遠いなぁ」と歩き出すやＳ治さんが漏らした。
　藪を漕いで登山道に出る。内蔵助谷出合までの下りは雪を被っていて滑りやすく、やはり撤退を決めて正解だったなと思いながら慎重に下った。

　出合まで下りるとちょうど３人組が通過して行くところだった。いやまた別の３人組もいた。その後すれ違った４人組はロッジくろよんを朝出て来たと言っていた。

切り立った崖には雪がこびり付き紅葉と絡みきれいだった。登山道には踏み跡の付いた雪が薄く続いている。
歩くにつれ３人組や単独、２人組などとすれ違う。結構な荷物を背負っている人、逆に軽装で小さなザックの人もいた。
４０人もすれ違っただろうか。これだけ人が行くとやはり行くべきだったかという気持ちがもたげてきてしまうが、あれだけ悩んで決断は下されたのだ。僕らは黙ってダムに向かって行く。

黒部川を渡る木橋にも雪が乗っていた。そして駅までの斜面に取り掛かる。足元を見るとこちら側の積雪は５ｃｍくらいだったようだ。もし今朝ここに着いてこのくらいの積雪だったら「せっかくここまで来たんだから」という思いの方が強かったかもしれない。朝起きて１０ｃｍの積雪に囲まれていた僕らとは違って。

１０：０５発の電気バスに乗って扇沢へ戻る。こちらでも雪は降ったようで日陰にわずかに雪が残っていた。
次の長野行きのバスは１２時発なので１時間半くらい待ち時間がある。２階の展望台へ行ってみると誰もいなくて静かな広い日なたがあった。時間がたっぷりあるのでテントやマット、レインウェアを広げて干しにかかった。
とてもいい天気で時間がなかなか進まない、何とももやもやした気持ちで過ごしていた。

ここからは後日談。阿曽原小屋のブログによれば、この日、下ノ廊下では事故も無く、無事に６４人が阿曽原に着きテントを張ったそうだ。
また、ヤマレコの記録を見ると、内蔵助谷出合の次の鳴沢出合までは登山道に雪が付いていたが、それ以降は無かったとのこと。
自分らの決断を間違いとは決して思わず、悔しさをバネにして「来年は必ず行くぞ」という決意をますます強くするのでありました。

（Ｈ口 記）